御　略　歴

重松恒信

1916年12月28日生まれ　愛媛県伊予市

1940年３月　京都帝国大学理学部化学科卒業

1945年５月　海軍技術少佐
　　戦後京都大学理学部副手、同助手、
　　工学部講師、理学部助教授を経て

1957年４月　京都大学化学研究所教授

1976年４月　京都大学化学研究所所長、
　　京都大学評議員（1978年３月まで）

1979年４月　京都大学
　　放射線同位元素センター長（1980年３月まで）

1980年４月　京都大学定年退職、京都大学名誉教授

1980年４月　近畿大学教授

1985年11月　近畿大学豊岡女子短期大学学長

1991年３月　同大学退職

1952年　　理学博士取得

1991年11月　勲二等瑞宝章受賞

2003年11月18日逝去

弔　辞

── 重松恒信先生を偲んで ──

松　井　正　和*

昨年11月重松恒信先生の御急逝を御子息からお聞き致し、しばらくは信じられない思いでした。昨年夏頃まで、先生のお元気な姿や声に接しており、その際「松井君、この頃身体の調子はどうですか。」と先生の方から先に気を遣っていただき、それを耳にした友人が「逆ではないのか」と私をたしなめたのでした。先生のあの時のお言葉が今でも余韻として残っております。あと１ケ月余りで、先生は米寿を迎えられましたので、門下生を集ってお祝いをしようと心に描いていた矢先のことでした。

重松先生は石橋雅義先生が京都帝国大学理学部分析化学講座の教授に就任されて間もない昭和14年に「軍艦缶石の分析化学的研究」のテーマで卒業研究をスタートされました。この研究はすぐに日本化学会誌に「海洋に関する化学的研究（第九報）」（昭和15年）で報告されましたが、これが先生の海洋化学研究の第一報となりました。私が修士一年の昭和34年12月、石橋先生が法経大講義室で「我が分析化学と海洋化学」の題目で御退官の記念講演をされました。その時、重松先生の御業績についてかなりの時間を割いて講演なされました。中でも、元素の地殻存在度（%）と海水中の濃度の比の対数とイオンポテンシャル（Z/r）との関係が１つの曲線上に現れる、いわゆる石橋・重松の規則性を説明されましたことが、強く印象に残りました。

丁度50年前の昭和29年３月１日、中部太平洋のビキニ環礁で原爆実験が行なわれ、近海で操業していた第５福竜丸が多量の放射能を被爆した事件がありました。重松先生達は直ちにビキニの灰を分離・分析され、これは水素爆弾によるものと解析されました。これが契機となり、放射化学研究の必要性が高まり、昭和32年化学研究所に放射化学部門が設立され、先生が担当されることになったのです。

昭和36年12月放射化学の知識も全くなく、放射性核種に触れたこともない私を助手に採用して頂きました。すぐにシュウ酸カルシウムによる放射性核種の共沈殿の研究をするようにと指導されました。先生の頭には、恐らく部門名である放射化学の研究を進めながら、海洋水中微量元素定量のための前処理法を検討するといった海洋化学研究への熱い意欲も合わせ持っていらっしゃったに違いありません。

以来昭和55年４月御退官されるまでの18年余り、先生の御指導の下で分析化学、地球化学、放射化学、錯化学など幅広い分野にわたって研究させて頂きました。その間、私の自分勝手な言動に御不快に感じられたこともあったと思いますが、先生はいつも鷹揚に構えられ、一度も叱られたことがありません。

先生は京都大学を御退官された後、近畿大学教授として11年間、西川泰治教授達と共同研究されました。同大学を御退官後は水墨画や書道をたしなめられ、展覧会等に出品される傍ら、私の在任中は研究室のセミナーやコンパにも楽しそうに参加なされました。

ここに謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

＊京都大学名誉教授